

楷書から行書へ

鳥取大学教授

住川

英明

行書は「日常書体」

「生徒は行書の学習を楽しみにしている」とは中学校で書写を担当されている先生方からよくお聞きする話です。行書の学習に快哉を叫ぶその口は、いったいどこにあるのでしょうか。

まず「大人っぽい、つづけ字」が書けるということを素直に喜んでくれるように思います。生徒にとつての公的な文字は二点画をゆるがせにしない楷書ばかりでしたが、ここに来てようやく暖味な書きぶりが許されたわけです。行書を使ってよろしいとお墨付を得たことは、「大人」といういいかげんな存在へ近づく、新鮮で喜ばしい出来事といえなくもありません。

加えて「つづけ字」には、よりグレードの高い、個性的、あるいは芸術的なものといったニュアンスが含まれています。もちろん国語科書写は芸術科書道とはそのあり方が異なりますが、「つづけ字」に対する社会的な通念からいえば、技術的により高度なもの、趣味的により高尚なものとして認識されていることは間違いない事実です。そして、「行書」とはどこか特別な書体であると考えている生徒たちを前にして、教師は、行書は「日常書体」であると高らかに宣言します。手紙などでよく使用される書体であり、私たちの生活の中でも、何気ないメモ書きなどに「つづけ字」は用いられている——その書体は「高み」にあるのではなく、実は「足元」にあることを生徒たちは再認識させられるのです。

速く書いていたわけです。

また、本来はねるべきところを止めている「止め化」現象も多くみられました。これは前述の「払い化」現象と矛盾するようですがそうではありません。はねるといふ動作は大きな動作であり、いったん大きくはね出した後で次の点画の始筆に移動するには手間がかかります。はねるよりは止めた方が比較的移動が容易です。これら二つの現象は、実画に現れた小さな変化ではありますが、《虚画の省略》にうながされたという点では共通しています。

目に見えない部分を省略するのは、目に見える部分に及ぼす影響が小さいという点では機能的であるといえます。しかし、実際の書字動作は虚実二連の動きで成り立っているため、書く速度がある一定の限度を超えると、「払い」「止め」といった点画の部分の変化にとどまらず、点画の組み立て（関係性）そのものが、書き手それぞれのやり方で無軌道に変化する可能性があります。簡単にいえば、字形がひどく自分勝手にくずれる場合があるのです。そうなる文字の正しさや読みやすさが損なわれてしまいます。

行書の書き方といわれるものは、速書に適した実画の関係性を示しています。連続可能な点画の組み立てを知り、それを習得することで、正しさや読みやすさを損なわない《実画の省略》を身につけるわけです。生徒が多くの経験を重ねるなかで自然と身につけてきた《虚画の省略》という工夫、その限界を理解させようえて、《実画の省略》という歴史的な知恵に眼を開かせたいと思います。

まずは楷書における運筆の学習から

行書学習におけるつまずきの大きな原因として、正しい筆順が身につけていないことが挙げられます。小学校ですでに学習した筆順の原則について学び直しておかないと、行書の学習は容易には進

行書が実は「日常書体」であるという驚きを大切にし、日常の書きぶりをブラッシュアップすることが、今後の自分自身の成長と向き合うことになるのだという認識を、まず持たせたいものです。

「払い化」「止め化」の意味するもの

小学校の高学年から中学校にかけては、学習量が多くなると同時に、書字にかける時間が長くなるので、そのために費やすエネルギーも大きくなります。このとき求められるのが速書の技能です。正確に言えば、ほぼ誤りのない字体、読みやすい書きぶりで文字を速く書くことのできる能力です。

以前、大学生を対象とした速書についての調査を実施して、愕然としたことがあります。印刷書体で示した定量の文章を「すばやく」と「丁寧」の二通りで視写してもらった調査でしたが、そこで得られた「すばやく」書かれたサンプルは、中学校で学習する行書の書き方とはほど遠い書きぶりだったのです。

「すばやく」ではストローク（筆線）がやや曲線的になっているものの、両者の文字の骨組みにはさして大きな変化がありません。そこには行書の書き方に特徴的な、目立った連続や省略が認められないのです。

しかし、細部を注視して気づいたことがあります。それは点画の終筆の変化です。終筆には「止め」「はね」「払い」の三種類があります。本来止めるべきところを払っている例が多くありましたが、この「払い化」現象は何を意味しているのでしょうか。それは字形として現れない部分の省略です。書字の動作には、動きが軌跡（点画）として紙面に残る部分と残らない部分とがあります（書道用語ではそれぞれを「実画」「虚画」と呼んでいます）。右の大学生は「止め」を「払い」とすることで動きの停滞を短くし、点画から点画への移動を「すばやく」することで、

みません。たとえ授業における学習は進めることができても、それを日常に定着させようとしたときに大きな壁にぶつかります。中学一年生ともなれば、生徒自身の書きやすさに則った正誤さまざまな筆順による書きぶりが、すでに定着してしまっているからです。そのように考えると、中学校初年度の書写の学習は、まず楷書における運筆の学習からじっくり取り組む必要があります。

点画から点画へ続く動きのつながりのことを「筆脈」とよんでいます。点画は個別のものではなく二連のつながりの中にあることを説明するときにとても有効な言葉です。「筆脈」について理解したうえで、ゆつくり運筆しながら丁寧に書く——「見したころは速書のための学びと相容れないかのようにですが、このようなやり方で書字動作全体についての意識が高まっていきたい、速書の場面を念頭においたその後の行書の学習も、上乘せがきまきません。

また行書の導入期においては、複数の点画の組み合わせからなる運筆の基本パターンを知り、それらに習熟しておく必要があります。たとえば、①横画から横画へ、②横画から縦画へ、③折れから横画へ、④左払いから右払いへ、というように点画どうしの関係をいくつかの《単位》に分類して考えます。「木」という題材では、②と④の《単位》を学ぶことができるというわけです。

従来、書写の学習では、点画という《部品》の学習から、字形という《完成品》の学習へと足飛びに展開するきらいがありました。もちろん偏旁などの「部分」に注目した文字の組み立て方の学習はありましたが、あくまで字形に基づいた《単位》であり、運筆に基づいた《単位》ではありませんでした。授業者がまず運筆によつて字形をとらえ直し、教材を分析・分類しておけば、これまでは異なつた授業展開、行書学習へのスムーズな移行が期待できるのではないかと考えています。